

### 3. 国宝特別調査 石製品・石製模造品編

河野 一隆 東京国立博物館

**要旨：**本稿は、宗像・沖ノ島祭祀で使用された石製品・石製模造品の悉皆調査に基づき全体像の体系的な把握を行った調査成果の一部である。最初に現在の到達点を念頭に研究史から論点を抽出した。次に、沖ノ島祭祀の諸段階に対応した品目・素材・技法の変遷をたどり、石製品・石製模造品の場合は岩上祭祀、岩陰祭祀、露天祭祀の3段階に整理できた。岩上祭祀段階は搬入品の比重が高く、岩陰祭祀以降になると在地生産の比重が高まる。各段階の祭祀の時期と祭具が型式学的に齟齬する場合には、祭祀が断続的に継続したと推定した。沖ノ島固有の擦切施溝技法は、規格的な平玉を作出するための打点形成のためのもので、手で割り取るためではない。石製形代は、精巧品を祖型とした大量の粗製品から構成され、様によって管理された律令的生産活動が投影されている。滑石製玉類の在地生産の上に技術系譜の異なる形代生産が複合したため、沖ノ島では律令祭祀では珍しい石製形代が採用されたと推定した。これは、宗像郡が神郡に定められ祭具の調達及管理されたことを示す。

**キーワード：**滑石製玉類、沖ノ島技法、石製形代、様、神郡

#### 1. 研究史

本稿は国宝福岡県宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品 伝福岡県宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品のうち、石製品・石製模造品の特別調査成果の概要報告である。玉類（勾玉・管玉・<sup>なつめ</sup>棗玉・切子玉）、三輪玉、腕輪形石製品（鋏形石・車輪石・石釧）、石製模造品（臼玉・平玉・有孔円板・子持勾玉・器物（斧・鏡）形）、<sup>かたしろ</sup>形代（人形・馬形・舟形）などの成品、未成品、原石など石製遺物全体を対象とした。各品目については他の祭祀遺物同様、膨大かつ詳細な研究蓄積があり、問題の所在を説明するためまず論点整理から入る。

**玉類** 成品の種類、石材や製作技法が弥生時代玉作を中心に整理されている<sup>(1)</sup>。製作技法の変遷を踏まえ整理すると、①試行錯誤、②<sup>だい</sup>大中の湖南技法の登場、③新穂技法の成立、④加賀技法の確立＝鉄製工具の採用である。とくに2大画期は、石器製作技術体系に立脚した板状剥片から規格的な管玉の生産技法が確立した弥生中期<sup>(2)</sup>と、鉄製工具で玉の成・整形、および穿孔される庄内式以降である。古墳時代中期以降には、出雲・近畿中央部が拠点化し、硬玉・碧玉に加えメノウや

滑石が使用され多様化する。とくに、古墳時代玉作の評価には奈良県曽我遺跡の位置付けと、先行する北陸・山陰の弥生時代玉作との技法的関連の解明が不可欠だ。古墳時代の玉作技法が弥生時代のように複数系統あるのか、倭王権が関与して一本化したのが焦点となる。ただし、前期に有力な首長墳が築造された九州・中四国、東海には玉作集団が定着せず、地域間交流のダイナミズムは複雑である。

**石製品** 倭王権の成立と共に玉の交易・交換も活発化し、弥生時代に集約的生産体制を確立した北陸を中心として腕輪形石製品の製造が始まる。弥生時代に九州北部の首長層で共有された海上他界観を象徴した南海産貝輪を碧玉・緑色凝灰岩に材質転換した石製祭具で、鋏形石・車輪石・石釧の順に近畿中央部から求心的に分布する<sup>(3)</sup>。型式学的に複数系統があり、広く共有された型式は王権が葬送儀礼の管理の中で石製祭具の配布に預かったこと、個別に分布する型式は首長間の政治的結合が想定される<sup>(4)</sup>。沖ノ島祭祀に限れば、九州では希少な腕輪形石製品3種が、葬送を伴わない岩上祭祀で使用されている。

**石製模造品** 大正時代に東京帝室博物館が所

蔵する石製模造器具が注目され<sup>(5)</sup>、戦後に大阪府カトンボ山古墳や三重県石山古墳など発掘調査による石製模造品が判明し、福島県建鉾山高木遺跡・福岡県沖ノ島祭祀遺跡などの祭祀遺跡出土の石製模造品も神道考古学との関連で研究が深化した<sup>(6)</sup>。古墳出土品と祭祀遺跡出土品は種類が異なり、古墳は刀子・斧・鎌などの器物形、祭祀遺跡では剣形品・子持勾玉・有孔円板・白玉などが卓越する。これは、かつて葬祭分離とも評価された、また、製作工房の調査で詳細な製作技法の検討も各地で進められた。このように研究は多岐にわたって進められたが、品目ごと個別に進められており、石製祭具の総合的な把握は十分とは言えない。

**円板・剣形** 有孔円板は古墳時代前期に集落・祭祀遺跡の石製模造品の中でもっとも早く出現する。初期は小型で孔間の距離が短く点数も少ない。有孔円板は鏡形模造品の退化とする見解もあるが、写実的な鏡形模造品と有孔円板の共伴事例もある。時期が下ると孔間が開き、単孔の比重が高くなる。剣形は初期のものほど写実性が高く、大型で茎と鎬を持つ。後期には平造りの剣形が増加し、基部に穿たれた小孔も切先へ移動し、最末期には基部か切先かの判断がつかないほど小型化する。

**白玉・算盤玉** 子細に見ると、側面中央に稜のある算盤玉と筒状の白玉に分かれる。製作技法は板状剥片から鉄製工具による調整剥離を連続的に加え個別に作り出すものと、筒形の素材石核を管切りし穿孔して仕上げるものの二者がある。また、沖ノ島祭祀では板状の素材石核へ方格に擦切施溝して穿孔し、割り取って仕上げる技法が報告されている<sup>(7)</sup>。

**子持勾玉** 子持勾玉の多くは出土状況が明確でないものや単独出土が多く、詳細な型式編年が困難だ。古式のものでは脊側―腹側―側面の子玉が4―3―1を基本とする。時期が下ると子玉の数が減少しまとまって削り出され、腹側の子玉が方形突起になる。親玉も丸みを失い断面長方形となり、「C」字形の湾曲が弛緩して上下に引き伸ば

されたものや両端が尖って「く」の字形に近くなる<sup>(8)</sup>。

**石製形代** 石製形代研究は、従来から律令祭祀との関連で捉えられている。天武・持統朝の大<sup>はらえ</sup>祓が平城京内で執行され、国家主導で国・郡にも広まったと考えられてきた。ただし、人形には「罪穢や悪気を一撫一吻によって人形に移し、流れに投ずる」祓具とみる説<sup>(9)</sup>と『肥前国風土記』佐嘉郡条「此川上有荒神、(中略)作人形・馬形、祭祀此神、必有応和」にみる神祭りの道具と見る説<sup>(10)</sup>が並立する。沖ノ島祭祀について見れば、露天祭祀で膨大な石製形代が島外から搬入されている点も特異である。

## 2. 調査経過と問題の所在

本調査で調査した遺跡(図1)は以下の通りである。

**岩上祭祀**：17号→18号→16号→19号→21号

**岩陰祭祀**：7号→8号→6号→23号→4号

**半岩陰・半露天祭祀**：5号→20号

**露天祭祀**：3号→1号

**伝沖ノ島出土品**

このうち伝沖ノ島出土品とは、学術雑誌に公表されたもの、御金蔵や社務所などに収められたもの、辺津宮に移されたものを含んでいる。2024年8月1・2日、11月14・15日に実施した調査では、混在の可能性が認められた4号遺跡の一部は実見に及んでいないものの、悉皆調査という今までに無いメリットを踏まえ、本研究では以下4項目の課題を設定した。

① 祭祀遺跡から出土した石製品・石製模造品の変遷を押さえ連続性と不連続性を明らかにする。沖ノ島は巨岩周辺に長期間にわたって祭祀が展開し、石製品の製作技法や素材の時期的な変化が追える稀有な遺跡である<sup>(11)</sup>。また、石製祭具が搬入品か在地で調達されたのかも考察したい。

② 沖ノ島は層位情報が限られているため、祭祀遺物が一括で供献されたか時期差をもつのか

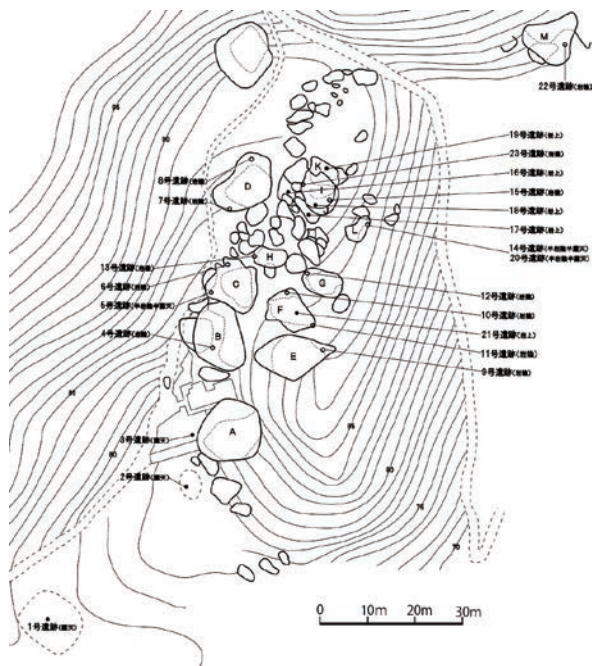


図1 祭祀遺跡分布図（註(17)書による）

悉皆調査でなければ判断できない。単一遺跡内の出土品で明確な時期差の有無を検討し、出土祭具が祭祀後の原位置を留めるか否かを検討する。

③ 沖ノ島特有の板チョコのように擦切溝を入れて、割り取って（方形）平玉を成形する技法の妥当性について検討する。報告書で推定されたような製作技法の復元が可能か否かを再検討したい。

④ 露天祭祀に集積した石製形代の型式学的な系譜関係を解明し、大祓に使用されたものか神へ奉獻するためのものかの手掛かりを得る。1号遺跡では限られた調査区ながら膨大な量の石製形代が出土したが、祓具か神祭りの道具かで意見が分かれている。型式組列を解明することで、この問題に一定度の回答が与えられよう。

なお、本調査では出土遺跡の確実な石製品・石製模造品を悉皆的に実見し全体像を把握することを優先した。今後の課題については末尾にまとめた。

### 3. 観察所見

沖ノ島では、すべての祭祀遺跡から等しく石製

品・石製模造品が出土する訳ではない。本節では石製品の比重の高い遺跡に注目し、沖ノ島祭祀の諸段階に従って整理し、品目や素材の変化を概観した。

#### （1）岩上祭祀段階

4世紀後半から5世紀にかけて展開した岩上祭祀段階では、三角縁神獣鏡や方格規矩鏡、内行花文鏡、<sup>きほう</sup>夔鳳鏡などの鏡や鉄剣、鉄刀、腕輪形石製品、玉類など古墳の副葬品と共通し、祭祀後に原位置のまま出土したと評価されている。

17号遺跡には碧玉製釧、ヒスイ製勾玉、滑石製勾玉および棗玉、碧玉・滑石の管玉がある。ヒスイは片面穿孔。18号遺跡には碧玉製釧があり斜面・側面とも刻線を密に施し、内孔に回転擦切痕が確認された。玉類には、碧玉・滑石製管玉があり線刻されたヒスイ製棗玉、小玉、白玉がある。帰属時期は三重県石山古墳の頃か？ 16号遺跡には無文の滑石製釧がある。一般に、腕輪形石製品は倭王権による生産と流通の管理が推定されるが、素文（無文）石釧の場合はしいて王権中枢からの配布と考えなくても良いだろう。通有の石釧は孔の内壁に回転穿孔痕が残る（図2）のに対し、素文石釧は刀子で削って穿孔する技法上の相違がある。玉類には勾玉・管玉・棗玉・白玉が出土した。勾玉は片面穿孔で糸魚川産硬玉製と見られるヒスイ輝石の嵌入が少ない灰白色のものが主体である。丁字頭勾玉もあり濃緑色の花仙山産碧玉と見られるものも含まれる。細身の管玉には両面穿孔が多く5世紀以降の出雲産か？。軟質凝灰岩製管玉には法量にバラツキが認められ、滑石製の管玉は規格性が高く長2.25～2.6cm、幅3～3.5mmに集約する。これは、個々の管玉が、前者は成形した角柱体から個別に作出された多数の産地からの搬入品なのに対し、後者は円柱体を輪切りにして作出されたことを示唆する。管玉の穿孔には石針穿

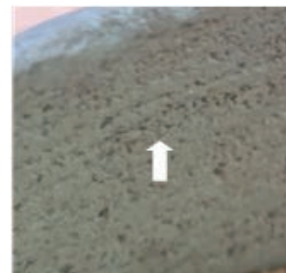


図2 車輪石の回転穿孔痕



孔と目されるものを含む<sup>(12)</sup>。このほか滑石製玉類には片面および両面から穿孔された棗玉、片面穿孔の算盤玉と白玉が含まれる。

露天祭祀まで継続的に白玉が見られるが、岩上祭祀では灰白色～灰褐色で径の小さなものが多い。和歌山または兵庫県北部産か？また、擦切技法には、板状石核に方格施溝したものと管玉を輪切りにする際の打点形成のために入れたものの両者が確認できる。輪切り成形の場合、側面に対し垂直に打割したものと不整形に割れたものに分かれ、後者には両極打法が用いられた可能性がある。九州北部の在地玉作は、弥生時代後期の福岡県潤・地頭給遺跡<sup>うるう じとうきゅう</sup>などの例があるものの主体ではなく、岩上祭祀には他所からの搬入品が多かったのではないかと推察される。19号遺跡は16号にほぼ近い時期だが、石釧はかなり簡略化する。素文石釧は、福島県建錐山遺跡など祭祀遺跡からも見られ、副葬品の石釧からの型式変化した模造品か、金属製釧を模造したかのいずれかだろう。片面穿孔のヒスイ製勾玉は沖ノ島祭祀で最大級、出雲花仙産と見られる碧玉、水晶製、滑石製勾玉があり、頭部や尾部の先端が尖るものが含まれる。特徴的なものは穿孔部に迎え孔（破碎された割れ円錐の整形か？）を持ち段状になったもの（図3-1）が見られる。特筆されるのは非常に狭長な管玉の存在で、穿孔方法の解明と同時に伝沖ノ島遺跡出土品同様、装身具以外の器物が奉献された可能性がある。21号遺跡は祭壇とも見られる遺跡である。管玉および棗玉は珪質頁岩（珪板岩<sup>けいばんがん</sup>）およ

び滑石で珪化木も含まれる。滑石製勾玉は丸みを持ち5世紀前半までにとどまる型式、ヒスイ製勾玉は片面穿孔で糸魚川産。緑色凝灰岩製勾玉は未成品あるいは仕上げを省略したものか、錐ブレを残す（図3-2）。本遺跡からは琥珀製勾玉の残片もあり、岩手県久慈ないしは千葉県銚子など太平洋側地域との交流を物語る。石製刀子の最終形態（柄部分？）と見られるものが含まれ、高宮出土のヤリガンナ形石製品<sup>(13)</sup>と共通する器具の一部分を象徴的に示したものか？21, 122点に達する大量小玉があり、算盤玉は個別成形だが数は少ない。白玉および極薄の平玉は個別成形のものと管玉に擦切を入れ両極打法で打割したものがある。また、素材は前者が搬入の可能性のある白色、後者は灰白色または灰褐色の滑石で砥石整形時の研磨筋が明褐色となる特徴があり、九州北部（篠栗か？）産の可能性が有る。双孔円板と共に有孔（単孔）円板が出現する。単孔円板には円形・方形に成形し側縁を研磨で整えたものと、1点のみだが白玉と共通した擦切技法で整形したものがある。擦切施溝は特定の玉作集団に限定された技法ではなく、打点を作る必要に応じて自在に採用された技法と見られる。平玉は擦切で成形するが、報告書のように4辺すべてに確認できるわけではなく、2または3辺でそれ以外は研磨された個体が多い。擦切施溝の方形平玉は白玉未成品と見る見解もあるが、穿孔品を未成品とは見なし難い。穿孔は鉄針による片面穿孔だ。基部に穿孔された扁平な剣形品および原形が板状斧か袋状斧かも判別できないような斧形状品が伴う。



図3 迎え孔と未成品（錐ブレ）？の勾玉

## （2）岩陰祭祀段階

5世紀後半になると祭祀遺跡の立地は底のように突き出た巨岩の陰へ変わる。岩陰祭祀段階で



図4 白玉に見られる施溝痕

は、鉄製武器や刀子・斧などの雛形製品、金銅製馬具などがある。金製指輪は新羅との、カットガラス碗片はシルクロード交流を物語る。

**7号遺跡**には水晶製切子玉があり、断片化しているが鉄針穿孔で反対側から割れ円錐を防ぐための迎え孔を穿ける。黒水晶を含む三輪玉があり、隣接して出土した頭椎大刀に装着したと推定できる。白玉は、九州北部産の滑石を素材とし、分割後に切断面両側を研磨して仕上げるものが多い。小型品と擦切施溝で分割した大型品が共存し、21号と8号の過渡的様相を示す。**8号遺跡**出土の玉類は、コ字形を引き延ばしたような碧玉勾玉と巨大なヒスイ製勾玉、径に対し穿孔径が大きな管玉を含む特徴的な組み合わせである。糸魚川で玉生産が終了後の6世紀中葉以降に下る、8号遺跡のヒスイ製勾玉の帰属時期や産地については評価が分かれよう。また、小型メノウ製丸玉も注目される。後期古墳の副葬品にはメノウ製玉類の比重が高いが、沖ノ島祭祀ではあまり使われない。切子玉同様、迎え孔が確認できる。滑石製品のうち、斧形品は台形にていねいに研磨され、穿孔された完形品である。袋状斧の便化と見るのが一般的だが、6世紀に板状斧の模造品が登場したとは考え難く、鐸であれば時期的にも整合する。白玉の多くは、研磨によって円柱体を作り出し、擦切施溝して打点を作り打ち割るものが大半だ(図4)。また、方格擦切によって玉を成形する沖ノ島固有の技法<sup>(14)</sup>では、4辺施溝は少なく、1辺が最多で2辺がそれに次ぐ。有孔円板には双孔と単孔があり、後者が圧倒的に多い、6cm程度に大型化する。また、成形とは無関係な擦切施溝もあり、円板類は擦切施溝で成形する平玉と共通した板状石核から作出されている。**6号遺跡**では、擦切施溝で打点を作り両極打法を併用して規格的に作出した白玉、板状石核に方格擦切を施し、打割後に刀子や砥石で成形・仕上げた平玉がある。薄板状の斧(鐸?)形や剣形も確認できるが、剣形は他の祭祀遺跡のように基部と切先が明瞭ではなく、菱形を呈する点が特徴的だ。**23号遺跡**はI号巨岩にまつわる遺跡で6世紀後

半の珠文鏡が出土したが、16・17・18号から崩落した可能性もある。また、4号遺跡や22号遺跡と混じっており、23号遺跡出土品を特定することができない。8号同様の白玉や両面穿孔の頁岩製管玉がある。**4号遺跡**からも多量の石製品・石製模造品が出土するが、「御金蔵」と呼ばれる沖津宮の背後に当たるこの遺跡は、縄文時代から中世までの遺物が出土し、元は別の場所にあったものを納める場所だった可能性が否定できない。つまり、この遺跡には混入品がかなりあると見られ、伝世の来歴も含め取り扱いに注意を払わねばならない。

### (3) 半岩陰・半露天祭祀

祭祀遺物に明確な変化がみられるのは岩陰祭祀の終盤から半岩陰・半露天祭祀にかけてで、古墳副葬品と共通しない金銅製の紡織具・琴や人形、祭祀専用土器などが奉獻されている。東アジアの激動を背景として日本固有の祭祀へ変質した。

**5号遺跡**で特筆されるのは鍬形石と車輪石だ。もちろん、腕輪形石製品の存続ではなく、前期古墳から石製品が出土することが稀な九州でも稀有な存在だ。鍬形石は奈良県島の山古墳のように左右対称形に便化する前の鍬形石でも最終型式で、突起部下辺が孔に内接する。車輪石は伝沖ノ島出土品(図5-1)よりも肋条がしっかりと作られ型式学的に先行する。沖ノ島出土の腕輪形石製品の特徴は多孔質の緑色凝灰岩を使用する点で、同一工房で製作された可能性が高い。管玉は碧玉または緑色凝灰岩製で両面穿孔、勾玉はヒスイ製

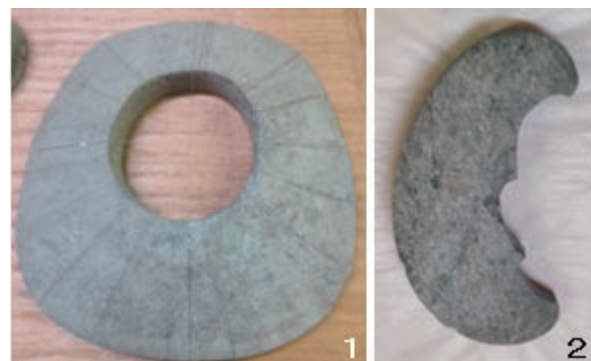


図5 車輪石と子持勾玉形代

で片面穿孔である。臼玉には両極打法で端面を研磨したものと打割したままのものがあり、平玉には方格擦切を3辺に入れたものが多い。**20号遺跡**からは腹部に2突起を持つ子持勾玉があり、未穿孔だがていねいに研磨仕上げされており、形代と見られる(図5-2)。

#### (4) 露天祭祀

8世紀になると祭祀遺跡は巨岩群から離れた露天に移動する。膨大な量の祭祀専用土器を含む多種多様な土器、人形・馬形・舟形などの石製形代を使用した律令祭祀が展開した。

露天祭祀では、滑石素材や製作技法が大きく変質した。円板や臼玉・平玉はそれまでの黄褐色または明褐色の多孔質の滑石で砥石研磨を多用して製作されるのに対し、人形・馬形・舟形・勾玉(子持勾玉含む)は硬質で粘度が高く、光沢を持つ石材を刀子による切削加工が多用される。岩陰段階以前のような砥石痕を表面に止めず、きめの細かな砥石か革のようなもので磨いて光沢を出した可能性もある。以上の差から、後者の一群を露天祭祀段階から登場する形代と区別することもできるだろう。**3号遺跡**からは板状品の両側縁からナナメに切り込みを入れて顔と体部を作り分け、眉・目・鼻・口など表現した人形の原型と見なせるものや目を表現した馬形、ていねいに製作された円板、臼玉が出土した。**1号遺跡**は露天祭祀の代表で、膨大な量の石製形代・玉・円板類が出土したが、一部に過ぎない。人形は①大型板状で刀子によって薬研彫りのような手法で目・鼻・口を表現し、側縁に切り込みを入れて両手を表したものと、②**4号遺跡**から出土したような手を表さず、両側縁の2ヶ所に切り込みを加えて鬚と首を表現し目・鼻・口を刻むものがある。前者が男性、後者が女性を表した可能性もあるが、これを祖型とした棒状人形は両側縁2ヶ所に刻線を入れただけに便化する。その中には、正中線のように刻線を1本入れたものがある。下端の両角を落とし前後を削ってあたかも斎串のように突き刺しやすいうように加工されたものが多い。棒状

品は、円柱ではなく断面蒲鉾形となるものが多いことから、角柱体から連続的に打割して角を取って作出されたことがうかがえる。1号遺跡から登場する形代が馬形と舟形で8世紀に下る。馬形は脚を表現せず、目や口を表した馬もあるが数は少ない。切込みが①上縁に2ヶ所、下縁に1ヶ所、②上縁に1ヶ所、下縁に2ヶ所(または3ヶ所)に分けられる。①は鞍を乗せた馬、②は鞍を乗せない馬の表現だろう。しかし、単に両側に1ヶ所と2ヶ所の刻みを入れたものが大多数を占める。舟形は人形同様に角柱体を連続的に打割して主剝離面を下にし、両短辺側に刻線を入れたものと中央に刻線を入れたものに大別され、舳先を尖らせたものと前後の意識が無いものがある。別作りのオール(櫂)を刺すことを意図したか、船室からハ字形に溝を切ったものも散見される。とくに**4号遺跡**には豊元国が早くに報告した精巧な準構造船がある<sup>(15)</sup>。また、船室部分を連続的にタガネ打ちしただけで割り抜いてないもの(図6)もあり、一方で莫大な残片の存在から、整形までの加工は九州本土で、仕上げは沖ノ島現地で行われた可能性も想定できる。勾玉は、半岩陰・半露天祭祀以前とは全く形態が異なり、片面から穿孔して迎え孔で受け、平面・側面を刀子やタガネではつた(図7-1・2)後に、砥石でていねいに研磨する。1点だけだが、擦切施溝痕を留めるものがある(図7-3)が、人形・舟形・馬形と比べ表面調整時の砥石による研磨の比重が高い。子持勾玉も1点出土し、あらかじめ半円形の板から作出された。円板類は、10cm程度に巨大化して厚みを増し、孔も中心から上部へ移動する。製作技法も、板状石核から打割するのではなく、角柱体から連続的に打割した後、主剝離面を上にして刀子で切削することで勾玉や円板に成形し、



図6 船室をタガネ打ちしただけの舟形





図7 勾玉の切削加工痕と1点のみの擦切痕

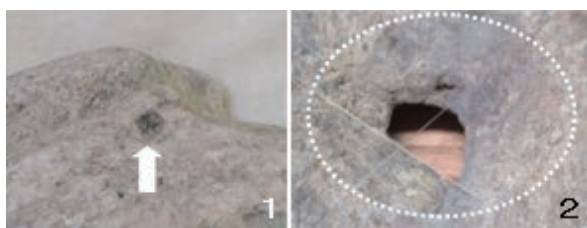


図8 鉄針穿孔痕と刀子回転痕

砥石で仕上げる。露天祭祀以前は打点形成のために擦切技法が多用されたが、人形や舟形になると擦切技法は圧倒的に少ない。平玉には上下の方格擦切がズレて打割されたものがあり、板状石核の表裏に先に擦切を入れたことが明らかだ。穿孔は鉄針を使用し（図8-1）、割れ円錐をそのままにしているものも多い。大型円板の中には穿孔時に刀子のような鋭利な刃先の先端を両面から回転させロート状断面を呈するもの（図8-2）があり、側面も刀子ではつつて成形される。これは、それまでの円板作成の技術系譜に乗らない。これらの石製形代や玉類・円盤類などの母岩となる転石礫も回収されている。

#### （5）伝沖ノ島出土品ほか

**腕輪形石製品・石製模造品** 前期古墳副葬品と共通した多孔質の石釧と車輪石がある。車輪石は底面があまりせり上がらず福岡県沖出古墳より時期的に下る。石釧は5世紀に下る可能性もあり、軟質の素材で通有の古墳出土品よりも風化が進んでいる。器具形の模造品の鏡は、両面から鈕孔をあけ砥石でいねいに整形される。

**子持勾玉** 子持勾玉には灰白色と濃緑褐色の製品があり、後者が新しく6世紀に下り、小玉の一つ一つが独立する前者は5世紀後半までに収まる。いずれも西日本製と推定される。

**玉類** 碧玉・メノウ・滑石・ヒスイを素材とした勾玉がある。碧玉製勾玉は後期古墳で見られるコ字を引き延ばしたような形状で、丸みを失う。メノウ製勾玉は奈良県曽我遺跡の可能性もある。滑石製勾玉は頭部と尾部が尖り5世紀後半以降に下る。細身の管玉、ガラス玉、水晶製算盤玉と珪岩ないし埋木製の棗玉が見られる。また、巨大な管玉は装身具ではなく玉杖などの石製品部材の可能性もある。

**滑石製玉類・円板** 滑石製の白玉、平玉があり、平玉は3辺施溝されたものが最多で2辺がそれに次ぐ。砥石で整形された大型円板も見られる。

4号遺跡は、先述したように取扱注意の遺物群だが、たいへん興味深い遺物が多い。子持勾玉は親玉と子玉が一直線に揃う5世紀後半頃の作だろう。

## 4. 石製品・石製模造品祭具の変遷

### （1）石製品・石製模造品の3段階

以上の観察所見から沖ノ島祭祀で使用された石製品・石製模造品には以下の3段階が見出せる。

#### ア）岩上祭祀段階

古墳副葬品と共通する車輪石や石釧と金属製釧を模した素文釧がある。器物形の石製品にはていねいに製作された鏡や斧または鐸形、剣形などがある。勾玉にはヒスイ・緑色凝灰岩・珪質頁岩・滑石などを用いた勾玉・管玉・棗玉・白玉・平玉が見られる。平玉は方格に擦切施溝のうえ打割し研磨で仕上げたものがある。白玉は灰白色・灰褐色の滑石で個別成形のものと管玉を輪切りにしたものがあるが小型品が多い。算盤玉も個別成形で白色滑石が使用される。方格擦切施溝の平玉も見られるが岩陰祭祀段階以降と比べると少ない。単孔円板も21号遺跡で出現する。岩上祭祀段階

では、搬入品が在地製品と共存するが前者の比重が高い。

#### イ) 岩陰祭祀段階

岩陰祭祀段階では石製品が消滅し、器物形は扁平な斧（鐸？）形・剣形に限定される。ヒスイ、珪岩、滑石などを素材とした勾玉、管玉が見られ、水晶製切子玉が伴う。後期古墳に多いメノウは小型丸玉があるものの希少だ。双孔円板はこの段階で消滅し、中心に穿孔された径6cm程度の大型単孔円板が主体となる。この段階では、黄褐色・明褐色の軟質滑石を素材とし研磨によって円柱体を作成し、1辺に擦切施溝し、そこを打面にして打割するものが大半だ。また、方格擦切によって平玉を成形する沖ノ島固有の技法も多用され3辺施溝が最も多い。また、岩上祭祀段階と比べ大型化する。

半岩陰・半露天祭祀段階は、石製品・石製模造品ではあまり画期が見いだせない。腕輪形石製品は明らかに帰属年代がズレており評価は困難だが、20号遺跡から出土した子持勾玉は未穿孔だがていねいに研磨整形されており、未成品ではなく形代と思われる。

#### ウ) 露天祭祀段階

露天祭祀では、灰白色または灰褐色の多孔質の滑石で砥石研磨を多用して製作される円板や白玉・平玉と、灰青色の硬質で粘度が高く、光沢を持つ石材を刀子による切削を多用して作られた人形・馬形・舟形・勾玉（子持勾玉含む）に二分される。後者は形代と見なすことができ、祖型となる見本を角柱体から連続的に剥片素材を作成し、刀子を多用した切削成形で便化した形態を作成する。前段階同様に白玉・平玉は擦切技法が採用され続けるが、形代では擦切技法の比重が低下する。鉄針穿孔後の割れ円錐をそのままにした玉類も少なくない。

#### （2）祭祀遺跡と祭具の帰属年代のズレ

石製品・石製模造品からみた沖ノ島祭祀の変遷は、以上の3段階にまとめられる。ここで注意すべき点は、出土遺物群に型式差に基づく年代幅が

認められる点だ。遺跡で使われた石製品に伝世を認めるか否かで、祭祀遺跡の評価は以下のように分かれる可能性がある。

① 石製品が伝世しないという前提→遺跡が長期間使用されたと考える。

② 石製品が伝世するという前提→供献された石製品のセットの形成期間に幅があると考え（その場所が、宗像かそれ以外か？）。

③ 遺跡出土の石製品は、使用後の原位置ではなく使用後に収納された状態であると考える前提→遺跡の使用・遺物の年代幅とは無関係となる。

いずれかを明確に断定することは困難だが、沖ノ島祭祀では搬入品が多い岩上祭祀から現地調達の比重が高くなる岩陰祭祀となり、再び新たな製作技法が導入されて露天祭祀となったことは確認できる。この点を踏まえると、腕輪形石製品が出土した5号遺跡や「御金蔵」と称される4号遺跡を除き石製祭具の伝世や収納といった状態は考え難く、遺跡が断続的にせよ長期間使われたことを示している。

### 5. いわゆる沖ノ島技法をめぐって

第1次報告書以来提唱された、沖ノ島固有の白玉成形技法は、成形時に板状の素材石核へ方格に擦切施溝し、手で割り取って仕上げると復元され注目されてきた。元来、擦切技法は縄文時代の石斧製作に遡り、石核から規格的な剥片素材を作成するために採用されている。弥生時代の新穂技法や大中の湖技法で多用され、古墳時代の玉作技法から脱落した擦切施溝分割が、なぜ沖ノ島祭祀で多用されるようになったかを考えてみたい。

九州北部でも古墳時代の白玉製作技法に方格に擦切施溝して分割成形する白玉製作技法が知られている。福岡県内では、若杉山の滑石産地に近い粕屋町古大間池遺跡や宗像市藤原神屋崎遺跡、福岡市三苫遺跡群で知られ、小郡市西島遺跡でも報告されている。沖ノ島祭祀遺跡における擦切技法を整理すると、採用時期は岩上祭祀の16



号で登場し 21 号で定着する。岩陰遺跡の 8 号で  
白玉・平玉製作技法として盛行したが、露天祭祀  
で登場する形代製作には部分的にしか採用され  
ず、滑石製玉類の製作技法に限定される。擦切が  
施される時点は、砥石による研磨で板状石核とし  
て仕上げた後で、分割される前である。擦切施溝  
は円柱体から規格的に打割する場合にも採用さ  
れており、打点を作出するためと推定される。す  
なわち、施溝は手で割り取るためではなく、分割

に際して打点を作出するための準備作業の一環  
と推定される。

したがって、報告書で推定されたように板チョコ  
のように擦切施溝を入れて割り取るというより  
も、分割をコントロールするためにあらかじめ  
方格に擦切施溝したと考えた方が妥当だろう。し  
かし、一度の打撃で分割できる範囲は打点から離  
れれば離れるほど少なくなる。そこで、施溝回数  
を復元し板状石核素材の大きさを推定してみた



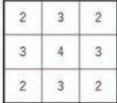
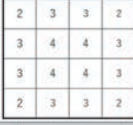

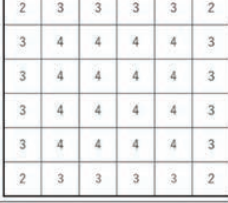
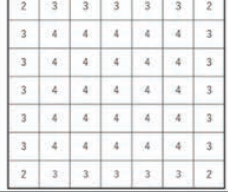
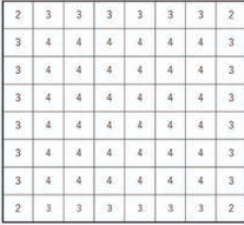
模式図	縦×横	1 辺	2 辺	3 辺	4 辺	総数	辺数の多少	石核の大きさ
	1	2				2	1	2 × 4 cm
	1 × 1		4			4	2	4 cm角
	2 × 2		4	4	1	9	3 = 2 > 4	6 cm角
	3 × 3		4	6	4	16	3 > 2 = 4	8 cm角
	4 × 4		4	12	9	25	3 > 4 > 2	10cm角
	5 × 5		4	16	16	36	4 = 3 > 2	12cm角
	6 × 6		4	20	20	49	4 = 3 > 2	14cm角
	7 × 7		4	24	36	64	4 > 3 > 2	16cm角

図9 板状石核への施溝の数と作出される玉の個数シミュレーション

い(図9)。

岩陰祭祀段階以降に盛行する施溝された方形平玉は、3辺施溝が最多で次いで2辺、4辺、1辺という順に減少する。1号遺跡全体から滑石製品が回収されたわけではないが、かりにこの傾向を敷衍すると以下のような試算が可能となる。板状石核に1本ずつ擦切施溝し他を打割研磨して成形した場合、1辺施溝痕のある2個の平玉が作出される。縦横に1本擦切施溝すると2辺施溝痕の4個の平玉が作出される。縦横に2本ずつ入れると2辺と3辺のものが4個で同数、4辺が1個の9個が取得される。縦横に3本あるいは4本入れると、3辺が2辺よりも多くなる。ところが、縦横に5本あるいは6本になると4辺が3辺と同数で、2辺が最少だ。そして、縦横に7本になると、4辺が最多となり3辺、2辺の施溝痕の順に作出される玉が少なくなる。そこで、施溝痕が3辺、2辺、4辺、1辺の順に減少することに鑑みれば、縦横に2本から4本の擦切施溝を入れた板状石核が主体だったと推定できるだろう。

そこで、これから滑石の原石の大きさを推定してみたい。1個の平玉の1辺が1.5～2cmだと見積もると、板状石核の大きさは5cm～10cm角程度と推定できる。もちろん、板状石核を作出する時に、不要な部分を断ち落としたであろうから、ただちに母岩の大きさとはならない。しかし、いずれにしても、一抱えもあるような大型石材ではなく、人頭大ほどの転石を母岩とした可能性が高い。したがって報告書で推定されたような多数の擦切施溝による多量の平玉製作は成立しない。

擦切施溝は大量の白玉・平玉を生産するために規格的に打割できる技法として、岩陰祭祀段階から大々的に採用された。これは、祭具の現地調達のために、九州北部で古墳時代から行われていた白玉製作技法から発展したと推定される。とくに、円柱体から白玉を作出する際に両極打法の採用、不採用のバラツキがあることに鑑みれば、決して専任工人のみが玉の調達に携わったのではなく、臨時の工人たちも動員され製作に当たったのではなかろうか。

## 6. 石製形代の製作をめぐる

露天祭祀に供献された膨大な量の石製形代は律令祭祀の中でも特殊である。平城京など律令祭祀では、木製形代が普通で、沖ノ島でも7世紀から鉄製・金銅製の人形が出現しておきながら、8世紀の露天祭祀で突然石製品に置換され、馬形と船形が登場する。しかも、沖ノ島に滑石産地は知られておらず、九州本土の三郡変成帯から渡海して沖ノ島に持ってこなければならぬ。人形や馬形など律令祭祀と共通した品目を製作しながら、なぜ運搬に不適な石製形代が沖ノ島祭祀では採用されたのだろうか？

すでに指摘したように、石製形代には少量の精巧品と大量の粗造品の関係が明確に指摘できる。これは、それ以前の石製品・石製模造品には見られない特徴だ。まず、この関係を整理したい(図10)。まず、人形の精巧品は先述したように、①側縁にナナメに切り込みを入れて両手を表す男性と、②2ヶ所に切り込みを入れ鬘と首を表現した女性が祖型となる。ところが、ほとんどの人形は側縁2ヶ所に刻線を入れた棒状品で②から簡略化したと推定できる。舟形は豊元国が報告した伝沖ノ島出土品が祖型で舳先側に線、艫側を段で表現し船室を割り抜いたていねいな作りのものと、船室を割り抜きそこからハ字形に櫂を差す溝を表現した前後を表現しないものが祖型だ。前者が構準造船、後者が丸木舟を表現した可能性もある。これらが簡略化して、前後と中央、前後だけ、中央だけに刻線を持つものの3種類に分かれる。馬形は背に鞍を乗せたものと乗せない裸馬の2種類がある。前者は上縁に2ヶ所と下縁に1ヶ所、後者は上縁に1ヶ所と下縁に2ヶ所(または3ヶ所)の馬形に便化する。勾玉形は祖型が不明だが、子持勾玉はていねいに仕上げられた未穿孔品が4号遺跡から出土している。これらの形代は、角柱体から擦切技法を使わずに連続的に分割して、主剥離面の形状を活用した点で共通する。粗製品といえども無秩序に模造されたのではなく、同一の技術系譜に乗る。そこで、石製形代は
















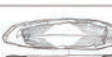






		祖型（様）	量産された粗製品（形代）
人形	女性	 1	 3  4
	男性	 2	 5  6
馬形	飾馬	 7	 8  9
	裸馬	 10	 11  12
舟形	準構造船	 13	 15  17
	丸木舟	 14	 16  18  19
玉類	勾玉	 20	 21
	子持勾玉	 22	 23

図 10 石製形代の様と粗製品の関係

成品の見本がもたらされ、同一系譜の製作技法で簡略化した形代を多量に作出している。これは、奈良県飛鳥池調査で見いだされた様を使用した律令的な生産体制<sup>(16)</sup>と共通するあり方だ。これは、国家的な生産管理を前提に共通した理念の下で大量の形代が生産されたことを意味しており、長期にわたる神祭りの蓄積と見るよりも祓とみた方が妥当だと判断される。一方、製作技術が岩上祭祀段階から続く円板・白玉・平玉類は神祭りのために奉獻されたと見て差し支えないだろう。このように、在地に定着した滑石加工技術の上に、技術系譜の異なる形代製作技術が複合した姿が、露天祭祀の本質と推定できる。

これは、木製形代が主流の律令祭祀の中で、なぜ、ひとり沖ノ島だけが石製形代を採用したかに

ついても示唆を与える。形代の調達にあたっては、誰もが製作できた訳ではなく、中枢で生産管理するために限定されていたのではなかろうか。ここで想起されるのは、宗像郡が神郡に指定され、宗像朝臣が宗像郡司を独占し祭祀を執行したことだ<sup>(17)</sup>。そこで、従来から沖ノ島に奉獻するために石製玉類を製作していた宗像地域の集団が、形代の調達にも特別に選定された可能性が考えられよう。

## 7. 結語

このたび石製品・石製模造品の悉皆調査に携わる機会をいただき、以下の諸点が明確化した。

① 石製品・石製模造品は岩上祭祀段階、岩陰祭祀段階、露天祭祀段階の3段階に分けられる。祭祀の場が開けた地から閉ざされた空間に移り、再び開けた地へと遷移する。祭祀の時期と時期的にズレる型式も存在するが、それは伝世を意味するものではなく、祭祀が断続的に行われたことを示す。ただし、5号・4号遺跡については慎重な検討を要する。

② 岩上祭祀から岩陰祭祀への画期は石製品、双孔円板の消滅と単孔円板の大型化、白玉・平玉・算盤玉の大型化、灰白色・白色の滑石が消滅、黄～明褐色の素材へ転換、擦切技法を駆使した規格的な玉類生産、子持勾玉の登場を特徴とする。

③ 岩陰祭祀から露天祭祀への転換は、灰青色の硬質で粘度が高く、光沢を持つ石材を刀子による切削を多用した形代の登場、円板の巨大化と穿孔位置の上昇、器物形の消滅を特徴とする。

④ 沖ノ島で特徴的な方格に擦切施溝する技法は、管玉を分割する際の打点形成にも用いられる。この技術は割り取るためのものではなく、成形時に打割による方向をコントロールするためである。平玉を作出する板状石核は、大きなものではなく人頭大程度の転石から調整されたものである。

⑤ 形代は祖型と便化したものから構成され、共通の技術系譜に乗り、新たに使用石材も変質す



る。これは、様によって管理された律令制下の生産活動と共通する。一方で、それ以前から継続する玉生産に技術変化は起こっておらず、在地に定着した玉生産と新規に開始された形代生産が複合したあり方を示す。宗像郡が神郡の一つに指定され、生産管理を貫徹させる必要性があった。従来からの宗像郡司<sup>きか</sup>膝下の石製玉類を製作した集団が、形代の調達に再編されたため、沖ノ島だけが石製形代を採用したと推定される。

このたびの調査では全体像の体系的な把握に重きを置いたため、量的分析や文化財科学による調査は行わなかった。最後に、将来的な課題と予測される成果について列挙したい。

① 法量を計測し、散布図を作成し検討する。碧玉と管玉の規格性、円板や玉類の大型化など时期的な法量変化を押さえるためには、法量分析が不可欠だ。それによって、過渡的様相を示す遺跡が可視化される可能性もある。たとえば、7号遺跡は21号遺跡と8号遺跡の中間的様相を示すようだ。

## ② 産地同定の問題

**碧玉管玉：**古墳時代に九州で碧玉製管玉生産は低調である。女代神社南遺跡B群（小松市菩提池系）が入っている可能性もある。

**滑石製品：**明らかに素材の質が変化しており、岩陰祭祀以降は九州の石材を使用したとみられるが、これを実証するためには文化財科学を援用した産地同定が必要だ。また、岩上祭祀の灰白色・白色の石材産地も不明である。

**コハクほか：**コハクはどこでも産出する訳ではなく、久慈や銚子での産地が知られている。沖ノ島祭祀で使用された背景の経緯解明が待たれる。黒水晶製三輪玉など、九州本土からもたらされた可能性のある素材に対しても岩石学的検討が必要だ。

沖ノ島祭祀遺跡の石製品・石製模造品は、すでに報告書で詳細な記述がなされているが、本調査によって、議論が割れている課題にいささかなりとも示唆が得られたなら望外の喜びである。末尾となったが、4日間の調査にお付き合いいただき

た、宗像大社神宝館、福岡県、宗像市の関係の皆様には深甚の謝意を表したい。

## 註

- (1) 寺村光晴 1980『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館
- (2) 田代弘 2001「「石針」について」『京都府埋蔵文化財論集』第4集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- (3) 小林行雄 1956「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」『京都大学文学部研究紀要』京都大学文学部
- (4) 北條芳隆・禰宜田佳男 2002『考古資料大観』第9巻 石器・石製品・骨角器 小学館
- (5) 高橋健自 1925『古墳発見石製模造器具の研究』帝室博物館学報 第1冊 帝室博物館
- (6) 大場磐雄 1943『神道考古学論攷』葦牙書房
- (7) 宗像神社復興期成会編 1958『沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡』宗像神社復興期成会
- (8) 大平茂 1989「子持勾玉年代考」『古文化談叢』第21巻 九州古文化研究会
- (9) 金子裕之著・春成秀爾編 2014『古代都城と律令祭祀』柳原出版
- (10) 笹生衛 2012「日本における古代祭祀研究と沖ノ島祭祀主に祭祀遺構研究の流れと沖ノ島祭祀遺跡の関係から」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』ブレック研究所
- (11) 注(7)書、宗像神社復興期成会編 1961『続沖ノ島宗像神社沖津宮祭祀遺跡』宗像神社復興期成会、宗像大社復興期成会編 1979『宗像沖ノ島』宗像大社復興期成会編ほか
- (12) 穿孔が石針か鉄針かについては、穿孔断面の形態から区別することができる。
- (13) 清喜裕二 2023「宗像大社辺津宮境内「高宮出土として伝世する品」が提起する問題について」『沖ノ島研究』9、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会調査報告書
- (14) 方格施溝を入れ穿孔した玉は白玉の未成品とする見解もあるが、穿孔後に加工リスクをおかすとは考え難く、成品とみるのが妥当である。
- (15) 豊元国 1938「舟形石製模造品に就いて（其一）」『考古学雑誌』28-9、考古学会、豊元国 1940「舟形石製模造品に就いて（其二）」『考古学雑誌』30-2、考古学会

- (16) 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 2022『奈良文化財研究所学報 71：飛鳥池遺跡発掘調査報告』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- (17) 笹生衛「宗像・沖ノ島における古代祭祀の意味と中世への変容―人間の認知と環境変化の視点から―」『「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群 特別研究事業 成果報告書』「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会調査報告書